

## 解説

## 福井県文書館資料叢書『福井藩士履歴』の利用価値

—おもに「剝札」「士族」について—

高 木 不 二

はじめに

このたび福井県文書館資料叢書として『福井藩士履歴』が刊行されることになった。これは「松平文庫」の「剝札」「士族」をはじめとする福井藩の人事関係史料を活字化するもので、まずはその壮大な計画を企画し実現に向けて動き出した、福井県および県文書館の関係者の方々に敬意を表したい。というのは、筆者にはこの史料に関する特別の思いがあるからである。史料の概要や沿革については、叢書9の吉田健氏の解説「幕末維新期の福井藩人事関係資料（松平文庫）」について」を参照していただくこととして、まずは筆者とこの史料群との浅からぬ結びつきから話を始めたい。

神奈川県在住の筆者が福井藩の研究を始めたのは、三〇年以上前の学生時代のことになる。まだ福井県立図書館が御泉水の近くにあったところで、図書館の二階にあった資料室ではじめて「剝札」に接した。福井藩に研究対象を定めたのは、横井小楠に関心があったからであったが、その背景を知ろうと安政期の藩政改革関係の史料を収集するつもりであった。当時図書館には奉仕課という部署があり、担当者が松平文庫の史料をいくつか見せてくださった。そのなかの一つが「剝札」であった。

その後何度か福井を訪れて史料調査を重ね、藩校明道館の運営の推移を中心に福井藩の安政改革研究をまとめることができたが、これがその後の私の研究の出発点となった。福井藩研究が私のライフワークとなるとともに、人事関係史料の活用の可能性をみいだすことができたのである。

福井藩関係の史料は、おもに「松平文庫」におさめられているが、長州の「毛利家文庫」や薩摩の「島津家史料」などと比べると圧倒的に史料数が少なく、そのぶん研究者とくに県外の研究者には手がかりがつかみにくい状況になっている。そうしたなかで、「剥札」や「士族」などの人事関係史料は、研究をすすめるうえで貴重な材料を提供してくれる、いわば歴史データの宝庫といっても過言ではない。

筆者の場合、これらの史料を閲覧するために福井まで出向いた回数はおそらく三〇回を越えているが、その半分以上の時間はこの人事関係史料の調査・収集にあてられている。史料を筆写し、カード化しまとめた手製のファイルは、今でも筆者にとっては門外不出の貴重な財産となっている。しかし今思うと、このために要した時間と労力は計り知れない。それが今回のプロジェクトによって、インターネットなどを用いて必要な情報を遠隔地からでも容易に入手できるようになるのである。至便というほかはない。これによって福井藩の研究は県の内外で今後より精密かつ正確に進められていくことになるであろう。

このように筆者と当該史料群との結びつきは浅からぬものであるが、以下においては筆者のこれまでの研究成果をふまえて、具体的に藩士の人事履歴がいかなるかたちで活用できるのかを提示し、これから福井藩の調査・研究に関わる方たちの参考に供したい。

## 一、制産方の発見

### (1) 「制産方」の成立

文久期の三岡八郎の富国策については、『由利公正傳』以外ほとんど史料がない。そうしたなかで、「剥札」や「士族」などにみえる人事記録が、筆者に制産方というこの時期の経済政策を遂行するうえで中心的な役割をはたした組織の存在を浮かび上がらせてくれた事例を紹介したい。

制産方の元となった製造方は「戦闘必用之器械」を製作する機関として、安政四年一月に発足

した。その組織の実体は必ずしも明らかではないが、製造部門は、銃砲（城下志比口）・火薬（吉田郡松岡）・艦船（坂井郡宿浦）というかたちで工場もそれぞれ別れており、『由利公正傳』によれば志比口だけでも盛時には職工千二百人を使役するという、かなり大規模なものであったようである。また管理部門としては、当初製造方頭取二名、同吟味役三名が任命され、その他見習をふくめたスタッフが少なからずおり、志比口の場合は、敷地内に工場とは別に役員詰所が設けられ、職工を監督し、庶務・会計をつかさどる態勢がとられていたという。

しかし松岡火薬局の二度にわたる爆発事故によって、製造方は縮小の方向に向かっていった。例えば、井戸惣三郎や本多七平の場合、「旧藩制役成」によれば安政五年七月五日付で「製造方当分御用薄に付勤向御用捨」という辞令を受け取っている。そしてこの製造方が、安政五年十一月を境に大きく組織替えをしていくことになる。次の人事記録をみてほしい。

### 【三岡八郎】

安政四巳 正月十八日 御製造方頭取被仰付候

五午 三月十八日 御製造方為御用、支度出来次第出府広く取調候様被仰付

同 十一月十六日 役儀其儘格式末之番外二被仰付、役中銀三拾枚ツ、年々被下置候、但席佐々木権六次

六未 六月十一日 制産方御用有之ニ付、肥後熊本表へ被差越候

万延二酉 三月 三日 御奉行役見習、御役料五拾石被下置、御水主頭次席二被成下、御役人並被仰付、且又制産方頭取其儘被仰付、銀三拾枚之儀も是迄之通被下置候  
(「剝札」略履歴)

### 【岡嶋恒之助（恒一）】

安政四巳 正月廿八日 御製造方見習被仰付候

表 1 安政 5 年制産方関係人事表

姓 名	石 高	異動前	異動後	異動時期
米岡源太郎	17 人扶持	製造方見習	制産方	安政 5 年 11 月 16 日
渥美助左衛門	5 人扶持切米 25 石	製造方見習	制産方	安政 5 年 11 月 16 日
都筑利八郎	3 人扶持切米 20 石	製造方見習	制産方	安政 5 年 11 月 16 日
団野真之助	5 人扶持切米 25 石	製造方見習	制産方	安政 5 年 11 月 16 日

「士族」「旧藩制役成」より作成

同 四月廿二日 御製造方吟味役被仰付候  
五午 十一月十六日 制産方勤向出精二付、小者給銀百五拾匁御扶持方壱人扶持被下置候  
万延元 八月十四日 制産方頭取被仰付、役中御扶持方三人扶持被下置候 (「士族」)

傍線部に明らかなように、いずれの場合も御製造方から制産方に名称が変更されている。これは単なる名称変更のかたちをとっているが、調べていくと岡嶋のほかにも安政五年十一月十六日には制産方に多数のスタッフが任命されており、大幅な組織改革がなされていたことが確認できるのである。参考のためにこの時期の人事異動で確認できる事例を一覧表として掲げておく(表 1)。ちなみに武器・弾薬・艦船製造など御製造方を中心的に担ってきたと思われる頭取佐々木権六はこの日に「病氣内願」のため休職となっている。

従来は残存史料が少なく、三岡八郎の例などから製造方と制産方は同一組織とみなされ、制産方という組織がとくに注目されることはなかったが、こうした人事データをみると、これは単に武器製造部門が延長・拡大した組織ではないのではないかという疑問が起ってきた。そこでこの背景をくわしく見ていくと、この時期は中央政界において幕府大老井伊直弼が登場し、安政五年七月には彼との政争に敗れた藩主松平慶永(春嶽)が「隠居・急度慎み」を命じられるという事件が起っており、そうした藩政の閉塞状況のなかで改革派三岡八郎らは開港にともなう海外交易を視野にいれた大胆な富国策を構想し、その実現に向けて動き出していたことがわかる。そのためには藩内特産物の殖産事業を担う新しい組織が必要となる。それがすなわち「制産方」であったのである。そしてやがてこれが他藩をうらやましがらせる文久期福井藩の経済政策の中核機関として発展していくことになる。

私の福井藩研究史にとってこの「制産方」の発見は一大事件であり、それをもたらしてくれたのがほかならぬ松平文庫の人事関係史料であったのである。

表 2 文久政変時制産方関係人事表

姓 名	文久政変前	文久政変時
三岡八郎	奉行・郡奉行・制産方頭取	御役御免・蟄居
岡嶋恒之助	制産方頭取	奉行役見習
平瀬儀作	勘定吟味役・制産方頭取	御役御免・遠慮のち勘定吟味役
加藤藤左衛門	制産方頭取	製造局頭取
長谷部甚平	寺社町奉行・郡方申談	御役御免・蟄居
長谷部協	制産方頭取	大御番入り・遠慮
勝木十蔵	奉行	奉行
大井弥十郎	目付	奉行
佐々木権六	御製造掛	製造局頭取のち製造奉行

「剝札」「士族」より作成

(2) 文久政変と「制産方」の解体

文久期にはいると、この制産方の動きを梃子にして、政治的にも熊本から招いた儒学者横井小楠の思想的影響を受けた人材が結集し、藩政に大きな力をもってくる。寺社町奉行長谷部甚平や奉行見習・制産方頭取三岡八郎、目付村田巳三郎らを中心とするいわゆる文久改革派である。彼らは桜田門外の変で井伊直弼が姿を消すと、前藩主の春嶽を盛り立てて藩政の主導権をにぎり、さらに文久二年幕府が朝廷からの圧力で春嶽の罪を許し、幕政への登用を求めてくると、これにのって幕政にまで参与していく。政事総裁職となった春嶽のもとで、参勤交代を緩和させ、将軍の上洛を実現させたのも横井小楠とそれを支えた彼らの力によるものであった。

しかし国内情勢は彼らの独走を許さなかった。翌文久三年上洛した将軍は朝廷・諸藩を巻き込んだ尊攘派の反撃にあつて立ち往生し、当時の春嶽や福井藩改革派のめざした朝廷・幕府・雄藩が一体となった「公共の政」を目指す構想は実現への道を阻まれる。やむなく彼らはいったん春嶽を福井に連れ帰り、あらためて兵威をもって京都を制圧し、局面を切り開こうと画策する。しかしこれは朝廷の同意が得られなければ、福井藩は朝敵となるきわめて危険な賭けであった。ここにいたって藩論は強行論と慎重論とに二分し、最後は春嶽が計画の中止を決断した。このとき京都出兵を強硬に主張した文久改革派は藩政からの退陣を余儀なくされた。文久三年七月の「文久政変」である。筆者はこの政変を幕末における福井藩政史の一大画期と位置づけているが、文久改革派の失脚は、それまでの藩政改革路線の解体・変更を意味する。ここで文久期藩政改革策の中核組織であった「制産方」がどうなったかを確認する必要がある。

制産方は（勘定）奉行・寺社町奉行・郡奉行などを組み込んだ全藩的組織であったため、その解体過程は当然藩政の変化を知る手がかりとなるはずである。そこで再び藩士の履歴史料を用いて、制産方頭取の行方を中心に周辺の人事異動を追ってみた。結果は（表2）に示したとおりである。ここでは制産方という呼称は消え、「製造局（方）」という名称が登場している。しかしこの

とき復活した「製造局（方）」が安政期のそれとは異質のものであったことは、文久三年十月二十四日付の岡嶋恒之助（恒一）に対する次のような藩庁からの達しをみれば、明らかである。

以来製造方<sup>レ</sup>之儀、精々不相弛候様精励可致候、且又試験之品有之節者其趣意相達指図之上取懸候様可致候事

一 豕 綿羊 やぎ 牛 鶏

右之分好候者有之節相渡可申候

一 銅山

一 山蚕

一 元結

右之分御製造方ニ而是迄之通取扱可申事

（「家譜 茂昭公」）

すなわち制産方は姿を消し、それに代わって復活した製造方は、武器・火薬製造以外に以前制産方が手がけていた銅や山蚕などの輸出向けの有力商品生産と、元結（紙製品）という国内向けの付加価値商品生産などの殖産事業を引き継いだことがわかる。人事の改造は組織の改造であり、それはまた藩政の方向を指し示す無二の指標であるのである。

## 二、文久改革派の復権と薩摩藩との交易の開始

福井藩における文久政変は、横井小楠の思想的影響力を排除して、あらためて幕府重視・富国策偏重の是正を標榜する松平春嶽専権体制の成立をもたしたが、その後文久改革派が慶応期に復権の動きを示すことは従来の研究ではほとんど看過されてきた。しかしこれも人事履歴を追うと、容易に見えてくる事実である。次の一覧表（表3）を見てほしい。



表 3 文久改革派の復権状況一覧表

姓 名	文久政変以前	文久政変時	文久政変以後
村田巳三郎	目付	側物頭	目付（元治元年 7 月）
千本藤左衛門（東岫）	目付	御役御免・遠慮	側物頭（元治元年 8 月）
牧野主殿介（小笠原幹）	番頭	隠居・逼塞	折々御機嫌伺い許さる（元治元年 12 月）
松平主馬（長沢鷗客）	家老	蟄居	御咎御免（慶応元年 4 月）
本多飛騨	家老	蟄居	御咎御免（慶応元年 4 月）
長谷部甚平	寺社町奉行	蟄居	御咎御免（慶応 2 年 6 月）
三岡八郎	奉行・郡奉行・制産方頭取	蟄居	御咎御免（慶応 2 年 6 月）

「剝札」「士族」より作成

時期の早いものから並べたが、ではこうした文久改革派復権の時期は藩政の動向とどう関わっていたのだろうか。

元治元年の禁門の変以降、幕府は尊攘派の牙城である長州を朝敵と位置づけることが可能になり、それにもなつて幕権回復への動きが加速していった。長州征討が発令され、福井藩も第一次征討に藩主茂昭が副総督として参戦したが、この戦いが長引くのを防ぐため薩摩藩や尾張藩とともに早期に長州との和議をはかり、凱旋した。しかし幕府はこれに不満を示し、長州に「容易ならざる企て」もあるとして、慶応元年長州の再征を命じたのである。これに対し副総督として第一次征長軍の撤収を指揮した福井藩は面目を失い、再征反対をうちだすとともに幕府との距離も開いていく。これにもなつて、藩内において文久改革派に対する政治的圧力が弱まるとともに、経済的にも第一次長州出兵以降悪化していた財政状況を立て直すため、富国策に実績をもつ彼らに協力を求めざるをえない状況ができたのである。

注目すべきは、こうした時期に、当時幕府がもつとも警戒していた薩摩藩とのあいだに大規模な交易がおこなわれた事実である。この交易については福井側に公式な記録がなく、わずかに福井商人三好助右衛門の略伝「三好波静略伝」（『越前史料』国文学研究資料館）に次のような記録が元治元年三月のこととして残されているにすぎない。

嶋津侯と旧藩主と産物交易の爲め、薩藩より先づ川南次郎左衛門、上川左太夫の両士を遣はされ、洋反物及び砂糖を蒸汽船に登載して三国港へ輸送し来る。

これは商人間の私的な取引きとも見ることができ、実際従来の研究ではまったくこの事実が注目されることはなかった。しかし筆者が鹿児島に調査に赴いた際に、偶然発見した一つの史料が目を開かせてくれた。鹿児島県立図書館にあった汾陽次郎右衛門の記録「汾陽光遠越航日記」で

ある。この汾陽という姓は「かわみなみ」と読むが、これが先の福井側の史料にあった「川南次郎左衛門」と関係があるかもしれないと思って手にとってみると、そこには汾陽が訪れた先の福井藩関係者の名前が驚くほど多く書きこまれていた。調べていくと実はこの「汾陽光遠越航日記」は、薩摩藩長崎重役である汾陽次郎右衛門が慶応二年福井に交易交渉に赴いたときの日記だったのである。慶応期における福井と薩摩の交流の事実、ここから筆者の幕末史を見る目は大きく開けたのである。

この日記に頻出する福井藩士に、内田閑平（衡）という人物がいる。まったく耳にしたことのない人物であつたが、人事履歴を調べてみると彼こそが慶応期の福井藩の財政をになつた中心人物であつたことがわかつてきた。そしてその彼を取り巻くように、文久改革時に藩政を動かしたメンバーがあらためて登用されているのである。まずは内田の経歴を追ってみよう。

安政六未 十一月十一日 家督相続、大御番組入、制産方見習被仰付

万延元申 十月 廿日 制産方被仰付候

文久二戌 正月十七日 中将様御附御近習被仰付候

文久四子 正月 九日 御附御近習番被仰付候

元治元子 二月廿五日 御奉行役見習被仰付

慶応元 七月 十日 御内用向有之二付長崎表江被遣、同廿一日出立、十一月廿八日帰

同二寅 二月 九日 産物会所掛り被仰付

同 六月 五日 御奉行本役被仰付、御役料都合百五拾石被下置候

同 七月廿二日 御内用有之二付長崎表江罷越候様被仰付候

慶応三卯 正月十六日 他国会所掛被仰付

同 五月 二日 会所奉行被仰付候

〔士族〕



これによれば内田は制産方成立とともに見習となり、万延元年本役となりその実務を担ったが、文久二年には春嶽側近の近習となっている。文久政変後の元治元年二月には奉行役となっているが、これは三岡八郎ら失脚後の穴埋めとしての意味合いが強い。その後は春嶽専権体制のもとで側近を経験した経済官僚として、奉行の勝木十蔵らをささえつつ、慶応期の藩富国策の担い手として頭角をあらわしていったとみられる。

慶応元年・二年の二度にわたる長崎出張では、薩摩藩の経済官僚である野村宗七（盛秀）と接触し商談をおこなっていたことが「野村盛秀日記」から判明する。このとき薩摩藩長崎重役であった汾陽次郎右衛門も関与していたことは間違いなからう。そして慶応二年三月、いよいよ汾陽と乗頭川上左太夫が大量の積荷とともに藩船に乗り込んで越前の三国湊に入港する。この応接にあたったのは他ならぬ内田閑平であり、彼はこの直前の二月に奉行役見習のまま、産物会所掛りに任じられている。

汾陽らは福井に入り、多くの藩士に接触していたことが先の「汾陽光遠越航日記」に記されていたことは先に述べたが、注目すべきはここに文久期に制産方頭取をつとめた平瀬儀作と加藤藤左衛門の名がみえることである。当時平瀬は勘定吟味役、加藤は製造奉行助としての顔見世であったが、彼らの経歴からしてその存在感は名目上の役職以上に大きなものがあつたであろう。このとき両藩による交易協定が策定されたものと思われるが、文久期の富国策偏重を一旦は否定した福井藩であつたが、財政再建をせまられるなかで、内田を支えるべく彼らベテランの力を借りることになったのである。

両藩による本格的な交易がはじまるのは協定締結をうけて慶応二年六月に薩摩藩見聞役である野村宗七が福井に入ったときからであるが、このときのおもな取引内容は福井藩側が藩内とその周辺地域から買い付けた生糸と茶を薩摩側が買い取ることであつた。薩摩はこれをイギリス側に売り渡し、その利益を艦船購入などにあてようとしていたようである。ちなみに福井藩はこの

とき商品買付け資金として薩摩から一七万両の融資をうけているが、これはイギリス資本を代表するジャーディン・マセソン商会がグラバーの経営するゴロウル商社（これはグラバー商会とは別に薩摩藩との交易のために設けられた商社）を通して薩摩に貸し付けたもののようで、この福井藩と薩摩藩の交易は、御用商人のおこなう藩際交易という枠を越えて、イギリス資本がからむ藩と藩のあいだの公式交易であったのである。

しかも一七万両といえど当時の福井藩の一年間の財政規模の二倍にあたる巨大な額である。慶応二年から三年にかけて、幕府がフランス資本と結んで財政再建に向かおうとしているときに、福井藩が経済的にイギリスと結ぶ薩摩側に立っていたことになる。これは薩摩藩が慶応二年一月長州と盟約を結んで討幕路線に踏み出し、一方の福井藩は同時期においてなお公武合体路線をとっていたとする従来の定説にそぐわないように見える。なぜこの時期両藩は接近したのか。この謎をとくヒントは、当時薩摩藩が公式にはまだ福井藩とともに幕府の権力回復をめざす動きに對抗して諸侯会議をおしすすめる立場に立っていたことにあると筆者は考えている。いずれにしろ、慶応二年段階の福井藩と薩摩藩の密接な交流をみると、慶応二年一月に結ばれた薩長盟約がそのまま薩摩藩の武力討幕路線に直線的に結びついたとする従来の定説を簡単に受け入れるわけにはいなくなる。

こうした明治維新史にかかわる重大な事実を筆者に示唆してくれたのが他ならぬ福井藩研究であり、そのとき藩士の履歴史料が大いに役立った事はいくら強調してもし過ぎる事はない。

本史料が今後も順調に刊行されることを切望するとともに、本史料を活用してこれから福井藩の歴史がさらに広く深く解明されることを期待したい。

なお最後に、福井藩を代表するテクノクラート佐々木権六や、藩政改革のキーマンの一人である長谷部甚平の履歴に関して、近年地元福井の歴史家によってこのデータを基礎にして更に他の史料にも踏み込んだ詳細な伝記研究が進められていることを付記しておく（長野栄俊「佐々木権

六（長淳）に関する履歴・伝記史料の紹介」『若越郷土研究』五二の二、二〇〇八年三月、本川幹男「幕末の福井藩士長谷部甚平について」『福井県地域史研究』第一三号、二〇一二年七月）。